

福岡市の市民参加の都市ビジョン作り

—報告と改善点—

天野 宏欣 *Hiroyasu AMANO*

(財)福岡アジア都市研究所研究主査

要旨：本稿は、平成 23（2011）年度に福岡市で実施された「アジアのリーダー都市ふくおか！プロジェクト」という市民参加の都市ビジョン作りの試みをレビューするものである。同プロジェクトでは、フォーラム、ワークショップ、インターネット・SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）、論文の募集やインタビューなど複数の方法によって、市民に都市の将来像を考えてもらい、都市のビジョンを提言してもらう活動を行った。プロジェクト開始からとりまとめまでの約半年間、多くの市民の議論喚起、市職員のモチベーション向上や有識者の意見収集において成功を見せた。一連の活動の概要紹介と、事務局に参加した一員の立場から、将来同じような活動をより良く行うための改善点を報告する。

■キーワード：市民参加、地域協働、都市ビジョン、福岡市

1. はじめに

1.1. 総合計画策定への市民の直接参加

自治体の総合計画¹⁾策定への市民参加は、従来から多くの自治体で、自治体が策定した計画素案に対するアンケート調査、意見・提言の公募、あるいは総合計画審議会での公募市民枠の設置等により参加機会が提供されてきた。東京都三鷹市が平成 13（2001）年の総合計画策定に際して「みとか市民プラン 21 会議」という市民主体の検討組織を設置し、市民組織が直接提言や素案を策定する取り組みを実行して以来、このような直接的に市民が総合計画策定に参加する事例も増えてきている。

市民が直接総合計画策定に参加することに関しては、参加者の代表性や中立性が確保されない懸念、事務局主導のとりまとめにより市民の主体性が不十分になる懸念、地域全体の視点に立っていない懸念などが指摘¹⁾されている。このような課題に対して、住民基本台帳から無作為に市民を抽出して検討に参加してもらう「プランニングスツェレ」²⁾型の試みが東京都千代田区や三鷹市等で

実践されるようになった²⁾。それでも直接的な市民参加による総合計画等法定計画の策定に関しては、参加する市民の意見が民意を反映する手段として評価されればされるほど、民意を反映すべく選挙を経て選出された地方議員との役割分担が課題となり¹⁾、活動の位置付けがあいまいになる場合がある。

1.2. 都市ビジョンに限定した市民の直接参加

本報告が紹介するのは三鷹市等で進められているような先進的な取り組みではないが、市民の総合計画への参加を促しやすい、都市ビジョン（都市像）作りにおける取り組みである。

現行の福岡市の基本構想は昭和 62（1987）年 10 月に策定された、約四半世紀の歴史を持つ都市の目標像を定めた文書である。この基本構想が策定される前の昭和 60（1985）年に、福岡市は都市像の改定に関する市民懇談会から「21 世紀を目指した 21 の提言」を受けており、基本構想の策定に市民の提言を取り入れることが当時から行われていた（表 1）。今般、福岡市は基本構想を含む総合計画の改定をにらみ、「アジアのリーダー都市ふくお

か！プロジェクト」（以下、「新ビジョンプロジェクト」）を主に平成 23（2011）年 6 月～8 月にかけて実施し、昭和 60 年同様、市民からの都市ビジョンに関する提言を受ける活動を行った。

表 1 昭和 62（1987）年の福岡市基本構想改定に向けた市民参加

福岡市基本構想 昭和 51 年 4 月策定	21 世紀を目指した 21 の提言 昭和 60 年 1～11 月市民懇談会	福岡市基本構想 昭和 62 年 10 月策定
心豊かな市民の都市 ・都市づくりの基本をコミュニティにおく ・生涯福祉を市民全体の誇りとする ・市民の生活の安全と心身の健康をまもる ・住まいと道とに、人間をとりもどす ・都市らしさの魅力のもと情報を組織化する	海に開かれた都市 ・自然を生かす都市づくり ・ファッショナブルな都心づくり ・秩序ある市街地整備 ・多様な交通ネットワーク ・快適な歩行空間の創造	自律し優しさを共有する市民の都市 ・一人ひとりが支えあう市民社会の実現 ・生きがいのある高齢化社会の創造 ・子供が健やかに育ち、女性が自立できるまちづくり ・生涯にわたって学ぶ環境づくり ・一人ひとりの心とからだの健康づくり ・心のかようコミュニティづくり
生きた緑の都市 ・生活と余暇とにゆとりをあたえる緑したたる空間をつくる ・市民が日常的に楽しめるスポーツ・レクリエーションの場をつくる ・農と漁とを都市生活に生かしていく ・博多湾の生きた潮を生かしながら活用する	アジアの拠点都市 ・環シナ海と西日本の中軸拠点都市 ・研究開発機能の充実 ・情報発信・流通機能の強化 ・イベント・コンベンション都市	自然を生かす快適な生活の都市 ・人間と自然が調和した都市環境づくり ・都市の発展と調和した市街地整備 ・多様で円滑な交通体系づくり ・水を大切にす都市づくり ・安全快適な生活基盤づくり ・共同体としての福岡都市圏の連帯
制御システムをもつ都市 ・都市の肥大と膨張とを、柔軟に制御していく ・都市用地は、ムダなく、ゆとりをもって利用する ・魅力的な個性をもつ都心、副都心をつくる ・交通・輸送を総合的、体系的に編みなおす ・生活に必要なものの供給と、その廃棄処理とをトータル化する ・広域的な行政運営にも、サービスバランスを考える	歴史と文化の都市 ・市民が創造する文化 ・博多から福岡のシンボルづくり ・風土・地域に根ざす街づくり ・都市景観の創造	海と歴史を抱いた文化の都市 ・市民による文化の創造 ・多様な活動の舞台となる都市づくり ・あたたかい風土、境界性を大切にしたいまちづくり ・美しい水にかこまれた快適な環境の創造 ・海に展開する新たな個性づくり
学び、創る都市 ・香り高い市民文化を継承し、創造する ・次代を担う子供たちを、守り育てて鍛える ・市民には誰でも何時でも、喜んで学ぶ機会と設備がある ・都市に活力をあたえる創造的で知的な産業を振興する ・消費者主催を基軸として、新しい流通システムをつくる	心を共有する都市 ・市民が創造する文化 ・博多から福岡のシンボルづくり ・風土・地域に根ざす街づくり ・都市景観の創造	活力あるアジアの拠点都市 ・心と心をつなぐ多様な国際交流の推進 ・アジアの交流拠点への機能整備と基盤づくり ・中枢都市としての新機能の創造 ・新たな産業の育成による経済基盤の強化 ・くらしを豊かにする農林水産業の振興
	自律する市民の都市 ・市民がつくる街 ・生涯学習の推進健康づくり ・こどもがのびのび育つ街	

出所：福岡市基本構想（昭和 50 年策定版、昭和 62 年策定版）、『ふくおかの 21 世紀』（S61.3）

2. プロジェクト概要

2.1. 市民参加の方式

福岡市が今般基本構想改定に先立って市民提言を収集した新ビジョンプロジェクトは、基本的には昭和 60 年時に市民の声を収集した活動を踏襲したものであるが、市民参加の方式は当時と比べ大きく変化した。

昭和 60 年の活動では、「ふくおか 21 世紀プラン懇談会」の枠組みを設け、その中で懇談会と市民フォーラムに分け、市民懇談会、都市政策研究会、市職員懇談会、ワークショップ等の活動が進められた。一方、新ビジョンプロジェクトでは、市民参加の全体活動を統括する枠組みはなく、様々な手段を使った提案・意見の募集と、フォーラムの実施、アンケート調査が個別に行われた（図 1）。

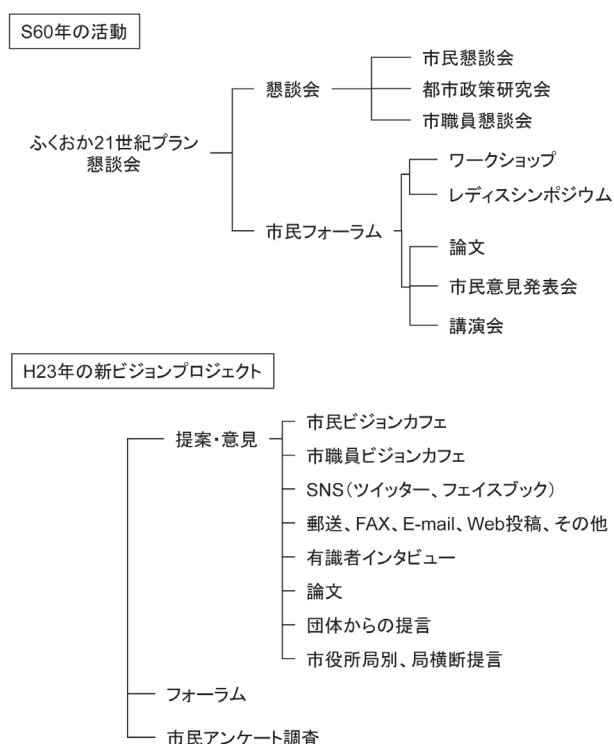


図 1 S60 年と H23 年の活動内容比較

出所：『ふくおかの 21 世紀』（S61.3）、『みんなが描いた福岡市の未来』（H23.12）

以下、市民からの提案を受け入れた特徴的な活動の概要を整理すると：

（1）市民ビジョン・カフェ

地域、企業、大学など少人数のグループで、ワー

クショップ（「ビジョン・カフェ」）を実施し、そこでの対話を通して生まれた意見・提案を集約したもの。ビジョン・カフェとは、ワールドカフェ³⁾の手法を用いた新ビジョン検討のためのワークショップで、話し合いのテーマは「25 年後の福岡がすばらしいまちになっているとしたら、そこではどんなことが実現しているでしょうか？」と設定され、参加した市民は約 1 時間の対話を通して考え、25 年後のまちの姿を他の参加者と語り合い、それぞれが描く都市ビジョンを言葉にしていった。

今回福岡市が実施したビジョン・カフェの特徴は、全てのセッションを市が主催したのではなく、市民自身がビジョン・カフェを開催することを促した点にある。ビジョン・カフェのマニュアルが公開され、ファシリテーターの研修が行われた後、市民が自主的にワークショップを実施し、その成果が事務局に送付された。

類似した活動事例に京都市の「京都市未来まちづくり 100 人委員会」⁴⁾や宇都宮市の「宇都宮プライド」⁵⁾といったものがあるが、市民と一緒にビジョンを考える活動に活用したのは恐らく福岡市が初めてで、また今回の開催規模は国内でも最大規模になると考えられる。

（2）SNS⁶⁾

市の様々な計画に対するパブリックコメントの募集や市民意見の募集に関して、これまで多くの場合電話、郵送、FAX、Web の投稿や E-mail という手段が使われてきたが、今回の新ビジョンプロジェクトでは SNS、具体的にはフェイスブックとツイッターも活用された。

新ビジョン検討の取組み、様々なイベントの周知、成果の情報発信と同時に、コメントや意見に対して事務局が返信をすることで、ソーシャルネットワークの利点を活かした双方向のコミュニケーションが図られるよう進められた。市民と行政の双方向交流において、SNS は今後必須のツールになってくることが理解できた取り組みであった。

（3）フォーラム

福岡市の将来像を検討するにあたり、視点・論

点になるようなテーマを設定し、テーマに造詣が深い有識者を迎え、市民の議論を喚起するフォーラムが11回開催された。

今回の一連のフォーラムの特徴は、有識者が特定のテーマについて講演することで知識を共有したり、パネルディスカッションをすることで意見・論点を出し合うだけでなく、最終回を除く毎回で「データで語る福岡の今・未来」というセッションが設けられ、各回のテーマに関連のある福岡市に関する様々なデータを紹介することにあった。これにより、福岡市の現状や予測をベースとした議論が行われ、通常のフォーラムより会場の共通認識を作れた点で、効果的だったと言える。

2.2. 有識者インタビュー

幅広く市民からの意見・提案を収集する一方で、専門家の意見を個別にインタビュー形式で収集したのも今回の新ビジョンプロジェクトの一つの特徴であった。有識者インタビューは、経済社会の動きについての現状認識と将来の見通しを確認することを目的におかれ、主に学識経験者、経済人を対象に行われた。

インタビュー項目は、①これまでの25年間、これからの25年間に対する見解（世界・アジア・日本・福岡市などの視点から）、②福岡市に目指してもらいたい（目指すべき）都市像、③福岡市が成長する過程で伸ばすべき良いところ、④福岡市が克服すべき課題、⑤その他有識者自身の事業や職業等からの提言、という5つに絞り、約1時間～1時間半のインタビューが行われた。

行政の計画策定に関連して行われる有識者インタビューの多くは、詳細が公開されなかったり、公開されても箇条書きの簡素な要約になったりする中、本プロジェクトの有識者インタビューは、発言の文脈、発言の背景にある事例紹介や有識者の経験もあわせて整理されており、充実した内容になっていると言える。また、プロジェクトの進行とほぼ同時期にインタビュー内容が公開されていたため、議論の材料がタイムリーに提供された点で、他の自治体の活動の参考にもなると考え

られる。

2.3. 市役所職員の参加

市役所職員も新ビジョンプロジェクトに大規模に参加した。市役所各局・区・室ごとにビジョン・カフェが実施され、また、局横断の提言チームも組織され、業務外の時間で議論して提案を策定するチームも見られた。さらには、係長研修や新規採用職員研修等市の研修プログラムの一部に、市の将来像を話し合うグループワークを設けるなど、市役所全体で活発な議論が行われた。

今回の新ビジョンプロジェクトの実施は、市役所内での課題整理や議論喚起を促した点で、非常に時宜を得たものだったと言える。

3. プロジェクト成果

3.1. 参加者と提案数

表2に今回の活動の実施結果を整理しているが、プロジェクトの中心期間であった平成23年6月～8月のわずか3ヶ月で、このように多くの市民、有識者、行政職員の参加と提言を得られたことは、非常に盛り上がった、成功したプロジェクトだったと総括できるのではないだろうか。

表2 新ビジョンプロジェクトの実施結果

形式	実施・参加状況
有識者インタビュー	52名
フォーラム	全11回実施 登壇ゲスト53名 参加者延べ約1,100名
市民アンケート	回答数延べ3,250名
論文	応募数26作品
ワークショップ（ビジョン・カフェ）	市民対象91回開催 （参加者延べ約1,800名） 市職員対象18回開催 （参加者約700名）
団体からの提言	3団体
市役所職員提言	27チーム（約400名）
手紙・ホームページなど	市民から391件提案 市職員から約700件提案
SNS	提案数207件 登録数約1,600 - ツイッターフォロワー数1,003 - フェイスブックいいね数642

出所：『みんなが描いた福岡市の未来』（H23.12）

（注）ワークショップ、手紙・ホームページなどの提案、SNSからの提案数はカードインテグレーションの手法を用いて集約した結果。

3.2. とりまとめの内容

平成 23（2011）年 12 月に福岡市から新ビジョンプロジェクトのとりまとめが公表された。①みなさんの描いた福岡市の将来の姿、②福岡市の現状や課題に対する主なご意見、③意見募集メニューごとの意見集約または抜粋など、④意見募集メニューごとの実施方法、という 4 部構成で、都市ビジョンに関するとりまとめだけでなく、現状や課題に関するデータ、新ビジョンプロジェクトの活動プロセス全体が要約されたものとなっている。

福岡市の将来の姿のとりまとめを表 3 に示しているが、21 の提言が示された昭和 60 年時の「21 世紀を目指した 21 の提言」（表 1 参照）と同じく、今回のビジョンのとりまとめも分野毎の都市像をあわせて 22 個集約された。

表 3 福岡市の将来の姿のとりまとめ

分野	福岡市の将来の姿
女性・こども・教育	- キラキラ輝く女性が日本で一番生き生きと活躍するまち - 世界に羽ばたくオンリーワンの子もたちが健やかに成長するまち - 大学の魅力が人をひきつけ、学びから生まれる活力で、元気と活気があるまち
健康・福祉・高齢化	- アジアの諸都市のモデルとなる、高齢者が活躍し安心して歳を重ねられるまち - ユニバーサルデザインですべての人が住みやすいまち - 心をゆったり幸せに暮らせるストレスフリーなまち
コミュニティ	コミュニティの再デザイン、新たなつながりが生まれる対話と交流のまち
生活基盤・交通	- 既存のストックの利活用で美しさと新たな価値観を生み出すコンパクトなまち - 量の交通から質の交通へ転換するまち
自然・環境	「もったいない」が一步進んだ、環境・エネルギー技術のショーケースとして発展するまち
安全・安心	発展と治安の両立した、皆が安全で安心して暮らせるまち
歴史・文化・スポーツ	歴史・文化・スポーツで充実した市民の時間が、世界をひきつけるまち
観光・集客	- 来街者がドラマを感じる、わざわざ行きたくなる吸引力のあるまち - 祝祭が年中ある、非日常を楽しむエンターテインメントシティ

農林水産	九州の安全・安心で美味しい食を、アジアに売り出すまち
アジア・国際化	- 外国人も住みたがり、多文化が日常化した、ボーダーレスなアジアの拠点になるまち - 学び続ける多言語教育のまち - 九州が一つの都市圏になって成長し発展するための核となるまち
港湾・空港	利便性の高い空港と港湾でアジアに直結するまち
産業振興	- 働く場がたくさんあり、わたらしい働き方が選べるまち - 国境を越えてプレイヤーが羽ばたき、夢が成長のエネルギーになるチャレンジのまち - 企業から選ばれ、愛され住みたいと思われる憧れのまち

出所：『みんなが描いた福岡市の未来』（H23.12）

3.3. 実施プロセス自体の価値

今般の福岡市の新ビジョンプロジェクトは、とりまとめられた成果以上に、その実施プロセスにおいて 2 つの面で価値を生み出したと整理できる。

一つ目の価値は、多くの市民に時間をとってもらい、市民自身が都市の未来像を考えるきっかけをうまく作ったことにある。これを可能にした要因は、①「都市ビジョン」という明確なテーマを設定したこと、②多様な市民参加方式を活用したこと、③多様な情報を絶え間なく提供したこと、という 3 点がポイントではないかと筆者は考える。

総合計画のような都市の多岐にわたる政策を網羅的に言及する計画は、一般の市民が直接参加して仔細に検討するにはハードルが高すぎるため、市民が参加しやすいようなテーマ設定は重要である。それを市民それぞれの「ありたい都市の姿」という分かりやすく、身近な誰でも参加できるテーマにしたことは評価できる。また、郵便、FAX、アンケート、E-mail、ホームページ、論文等のテキストによる意見募集だけでなく、市内各地でワークショップを開催して、対話をする中で意見を収集するなど、今までにないイベント的な取り組みで市民の関心を喚起できたことも注目すべきであろう。さらには、当初から事務局案があって、それをたたき台に議論する形式ではなく、プロジェクトの進捗にあわせて、フォーラムでの議論内容や

データを公開し、ワークショップの成果や有識者インタビューの内容を随時公開することで、多様な情報を絶え間なく提供して、考えるための新鮮な刺激を市民に与え続けたことが大きかったのではないだろうか。

二つ目の価値は、市役所の職員が時間をとって、自らが所属する組織の立場から、あるいは組織に限らない立場から、福岡市の未来を論理立てて説明することを考えるきっかけを作ったことである。

市役所職員の提言は、一般市民の「ありたい都市の姿」に関する説明とは違って、都市のポテンシャルや経済社会情勢を踏まえた提案になっており、15局、7区、所管横断5チームの計27つの提言がまとめられている。局や区の提言は、それぞれの組織の基本方針を踏まえているものだと思うが、それでも福岡市全体の将来像の中での位置付けが考えられているものが多かった。また、所管横断チームの提言は、行政の縦割り思考から解放されて、あるべき都市のビジョンとそれに向かうための様々な政策案が提言されていた。

通常の業務では縦割りで物事を考えたり、全体像の見えないルーチンワークに没頭したりする行政職員が、あらためて都市を理想像に向かわせるための組織の責任、役割、組織のあり方や改革すべき課題などを考えたこと、しかも大変盛り上がった形で多くの職員が参加したことは、福岡市を運営する組織全体の意識が良い方向に向かった意味で大きな収穫であったと感じる。

4. 同様な事業を行う場合の改善策

一般の新ビジョンプロジェクトは上述のように概ね成功裏に終わったが、今後同じような事業を実施する場合、より良く行うための改善点を最後に大きく5つまとめたい。

4.1. アウトプットイメージの吟味期間を

福岡市長が新ビジョンプロジェクトへの参加を呼びかけた記者会見は5月31日に行われ、その日から市民参加活動の募集を始めとする各種活動が開始された。当年度予算の事業であったことを考

えると、4月中頃から準備を始めて、1ヶ月程度でプロジェクトのスタートを切ったことになる。

このような緊迫したスケジュールで開始したので、プロジェクト成果となる具体的なアウトプットイメージを固める期間が短く、事務局はプロジェクトを進めながら、各活動から出てきた意見を見ながら、どのように集約していくかを随時検討していった。結果論になるが、市民の議論から出てくるフレーズ、有識者インタビューから得られる専門的な提言、市民の論文で提言される生活者目線の未来像、SNSで流れるキーワードなど、意見を発する主体や媒体が違えば、得られる意見の内容も深みも明らかに違ってくる。

各種活動が開始すると、事務局は活動の運営にどうしても集中せざるを得なくなり、時間を取ってアウトプットイメージを作る活動が疎かになってしまう。今後の改善点としてまず挙げられるのは、様々な提言活動を通して収集されうる情報の性質を予めしっかり吟味して、どのような性質の情報はどのように処理し、どのようなアウトプットにするのか、という事前の情報処理の方針、あるいは方法論を精査する時間を取ることが重要であろう。十分な準備が行われることで、全体の作業ボリュームを見渡すことが出来、効率的な運営がはじめて可能になる。

このアウトプット吟味期間を、市民に対しては活動の周知期間として位置づければ、プロジェクトの発表と同時に周知期間なく募集開始、という事態も回避することができるであろう。

4.2. 期間限定でなく、継続できる仕掛けを

新ビジョンプロジェクトは、市政の位置付けとしては新ビジョンを市民と一緒に作った段階で、これを参考に次の段階で総合計画を議論する、という切り分けがなされている。同様に新ビジョンプロジェクトにおいても、最初の3ヶ月程度は市民の声を収集する活動段階で、次に意見を集約する段階に切り分けて、最後にとりまとめ成果を公表する、といった形でそれぞれの活動が期間限定で行われてきた。

しかしながら、当初3ヶ月の活動を実施して市民全体の参加気運が盛り上がっている中で、あえて活動期間を理由に提言を締切る必要はなかったかもしれない。市民からの提言内容をどのように処理するかの方法論さえ決まっていれば、かつ活動気運さえ継続しているのであれば、市民に自由な提言活動を実施していただいて、いつでもその意見を吸収できるような体制にすることも、今後の改善点として考えていいであろう。

市民活動だけでなく、有識者インタビューも期間限定で話を聞くのではなく、例えば毎月一回継続的に意見をいただき、それを新ビジョンに限定せず、総合計画その他様々な計画の参考にしていくことも特に問題はないだろう。フォーラムに参加した有識者には、時間が限られたフォーラムの場だけでは語り尽くせないとの意見もいただいていたので、フォーラム後の別の場（例えば、フォーラム参加者同士の公開ビジョン・カフェ）を設けて、もっと深く話を進めてもらう工夫もあってよかったかもしれない。このような活動によって、福岡市の各界各層と有識者の間でネットワークが形成されることは、市全体の知識・能力向上にも役立つのではないかと。

期間を限定せざるをえないのは、プロジェクトの予算やその執行期間に限度があるからであるが、議論の場をSNSといった既存のインターネット上のプラットフォームにうまく移していく工夫があると、より期間にとらわれず、かつ出費を抑える形で継続した提言活動が進むと考えられる。

4.3. SNSでの議論を盛り上げる工夫を

ところで、地域に特化したSNSは、地域の課題を発見・解決する住民の協働促進とコミュニケーションに適したツールであり、また、行政の力だけでは解決できない問題を地域住民の知恵を借りながら解決することにも活用できるものと言われている³⁾。そのため、多くの自治体首長、議員、行政組織、個別事業に至る様々な行政の活動においてSNSが活用されている。

新ビジョンプロジェクトではフェイスブックと

ツイッターにそれぞれオフィシャルアカウントを作り、そこで福岡市の将来像に関する提言の発信を呼びかけた。一般からの書き込みやツイートに対して、事務局メンバーは都度コメントを返し、双方向の交流になるよう心がけた。しかしながら、福岡市におけるSNS利用がまだ普及途上であり、新ビジョンプロジェクトが福岡市のSNSを使う先行的な試みでもあったことから、今後に向けた改善点がいくつか挙げられる。

① 頻繁なサブテーマ設定

新ビジョンプロジェクト全体は「都市ビジョン」という明確なテーマを設定したことで、各市民参加活動は盛り上がったが、ことSNSに関しては、この大きなテーマだけでは継続的な投稿や提言を得ることは難しかった。

限られた登録者が同じ話題を議論する限界があるので、もっと多様なサブテーマの設定を頻繁に行うことが重要であろう。例えば、週ごとに公式アカウントから「みなさんの都市ビジョン」「福岡の好きなところ」「福岡のきれいなところ」など簡単なテーマを設定して、つぶやいたり書き込んだりしてもらうことで、同じ登録者でも違う話題について意見を出せるように仕向ける工夫が考えられる。

② 影像、画像の活用

SNSの利点の1つとして、影像や画像を手軽にシェアできることがある。新ビジョンプロジェクトでは、数多くのビジョン・カフェや、内容の濃いフォーラムが開催されたが、それぞれの活動画像や動画を編集して共有することで、影像や画像に対するコメントや議論がより活発になる可能性があった。あるいは、影像を見ることで「こんな様子だったらビジョン・カフェに参加したい」という新たな参加意欲を刺激することにもつながったかもしれない。

また、最終とりまとめの際は、多数の市役所職員の協力を得て、市役所講堂全体を使って市民からいただいた言葉の集約を手作業で行ったが、このような画像を記録として残し、それが多くのネ

ットユーザーの目に触れることができれば、議論を活性化させるだけでなく、集約化のプロセスもより理解され、活動全体に対する評価も高まるであろう。

③市長、有識者、公式アカウントの書き込み

新ビジョンプロジェクトでは、SNSでの発言に対して、主に事務局の構成員がコメントを返信する形で行われた。顔が見えるコミュニケーションを心がけたためであるが、逆に顔が見えるがゆえに忌憚のないコメントを寄せにくい雰囲気ができあがったかもしれない。

SNSは双方向のコミュニケーションがポイントだと言われているが、市職員や事務局構成員からの当たり障りのないコメントではなく、市長からのメッセージ発信、フォーラムやインタビューに登場した有識者の議論喚起、公式アカウントからの政策案の提起など、インパクトのある発言者・発言内容になるよう工夫することで、より活発なコメントが寄せられるのではないだろうか。

④クローズドな議論の場も設ける

もっと忌憚のない議論を喚起するために、特定のテーマに関してはSNS内でオープンに議論するのではなく、クローズドな場を設けるのも考える方策かもしれない。

例えば、フォーラムで設定された特定のテーマについて、フォーラムに出席した有識者とSNS内の議論への参加を申し込んだ市民とが、閉ざされた場で議論を進める形式もあっていいかもしれない。あるいは、事務局が意見を集約するにあたって作成したたたき台を、クローズドな場でさらに意見をいただく形にしてもいいかもしれない。

⑤SNSの各種ツールを活用する

SNS参加者のコメントを刺激するために、SNSに用意されているツールを活用することも重要であろう。例えばフェイスブックであれば「クエスチョン」の機能を使って選択肢式の質問を投げかけて、回答者がすぐにその意見が多数派なのか少数派なのかが分かるようにしたり、ツイッターであれば週次に設定されたテーマ（例えば「福岡の

好きなところ」）に関するつぶやきで出現したキーワードのランキングを紹介したりするなど、コメントや反応をすることで、自身の発言の立ち位置が分かる情報提供を心がけてみてもいいのかもしれない。

4.4. 複数活動間の連携を

新ビジョンプロジェクトの複数の活動間の連携をもっと取ることで、より多くのアイデアが生まれた可能性がある。

計11回のフォーラムが実施されたが、市民が有識者の議論を聞く通常のフォーラムに加えて、フォーラム終了後に有識者も交えた形で会場の参加者とビジョン・カフェを実施するような試みもあってよかったであろう。これにより、有識者の生の声を聞いた市民が触発され、地域でこの活動の紹介をすることで、その話を聞いた別の市民が別のフォーラムに参加したい意欲が高まるのではないかな。

50数名の有識者にインタビューを実施したが、インタビューの際にSNSでのコメントも申し入れて、インタビューの内容をアップした際に、本人から更にフォローアップするコメントをいただくような設計にしてもよかったであろう。そうすることで、インタビュー記事を読む市民が増え、SNSでの議論も活性化できたであろう。

フォーラムやビジョン・カフェのリアルな場での活動と、SNSでのバーチャルな場での議論は、リアルタイムに連携する必要は感じられなかった。しかし、前述のように、フォーラムやビジョン・カフェの内容をテキストだけでなく、映像で残してアップすることで、SNSにアクセスした人々が追体験できるようになり、リアルのフォーラム、ビジョン・カフェへの参加をより促すことが出来ると考えられる。

4.5. 一元化した市民コミュニケーションを

新ビジョンプロジェクトでは以上のように複数の市民向け活動を行っていたが、事務局内でチーム分けをして取り組んでいたため、市民や有識者からそれぞれが異なる事業の活動である認識だっ

たとの声も聞こえた。例えば論文募集とビジョン・カフェの情報を取得する際、それぞれ違う発信者の違う情報源から最新情報を入手しないといけないう状況であった。これは、プロジェクトのロゴや言葉を統一しても、広報の発信源や発信の仕方が違うことによって、受け手側に異なるものである印象を与えたことにあったと考えられる。

改善点としては、活動全体のプロデューサー、あるいは市民コミュニケーション担当を立てることで、対市民のコミュニケーション活動を一元化することが考えられる。

一元化して「ここに最新の情報がある」状況を作れば、自ずと市民のアクセスが一箇所に集まるであろう。つまり、担当者の一元化と同時に、活動全体のコントロールセンター（リアルの場の事務局詰所や、バーチャルの場のポータルホームページ）を公開することが重要である。市民がここにアクセスをしたら、すべての活動の予定と進捗状況が分かるようにしておくべきであろう。今回の新ビジョンプロジェクトのホームページは、各活動ページへのリンクやイベントの周知広報が中心となってしまって、活動の予定と進捗を分かりやすく示すポータルにできなかったことは反省点である。

活動の予定と進捗が分かりやすく示されて、参加できるイベントが残り少ないことがひと目で分かれば、より市民の参加意欲を掻き立てられるし、また、例えば論文の応募を呼びかけると同時に、市民の論文提出意思表示をお願いすることで、応募総数が予め把握でき、締め切り時の作業目処をつけることができるという運営面でのメリットも考えられる。

5. おわりに

福岡市に限らず、今後自治体の様々な行政計画策定に際して市民の直接参加を求める動きが活発化すると考えられるが、このような市民参加の取り組みを実施する際、本稿でまとめた改善策が参考になれば幸いに思う。

本稿はアジアのリーダー都市ふくおか！プロジェクトに参加した一員として、反省の意を込めてまとめたものであり、同プロジェクトに参加する機会を与えて下さった福岡市総務企画局企画調整部、並びに本稿作成の上で貴重な意見を下さったプロジェクトメンバーの皆様にこの場を借りて御礼申し上げたい。

注釈

- 1) 総合計画とは、地方自治体が策定する自治体のすべての計画の基本となる、行政運営の総合的な指針となる計画である。通常、自治体のめざす将来像と将来の目標を明らかにし、これらを実現するための基本的な施策の大綱を示す「基本構想」、基本構想において設定した自治体の将来目標や基本的施策を実現するために必要な手段、施策を体系的に明らかにする「基本計画」、基本計画の施策に基づいて、事業内容や実施時期を明らかにし、行財政運営の指針とする「実施計画」からなる。
- 2) プラヌンクスツェレとは、「無作為抽出で選ばれ、限られた期間、有償で、日々の労働から解放され、進行役のアシストを受けつつ、事前に与えられた解決可能な計画に関する課題に取り組む市民グループ」と定義付けられている。
- 3) ワールドカフェとは、リラックスした雰囲気を作り出し、自由に意見を出し合えるようにする話し合いの手法。参加者をカフェテーブルのような小グループに分け、時間を区切り、たびたび相互にメンバー交換をしながら、多様な会話と組み合わせの偶然性を楽しむワークショップ。
- 4) 「京都市未来まちづくり100人委員会」は、幅広い層の市民の参加を得て、従来の行政の縦割りを排し、京都のまちづくり全体に関するテーマを、市民自らの発想により大局的な観点から設定したうえで、今後のまちづくりの方向性や具体的な取組方策について、白紙の段階から議論する市民組織として、平成20（2008）年9月に京都市により設立されたもの。
- 5) 「宇都宮プライド～100年先も誇れるまちを、みんなで～」は、宇都宮市内外の市民が自ら宇都宮の魅力を考え、発見し、形作り、発信していくことで、宇都宮が「100年先も誇れるまち」となることを目指す取り組みで、平成21（2009）年4月に宇都宮ブランド推進協議会が設立され、「認知」、「信頼」、「愛着」の3ステップにより、宇都宮の魅力を総合的に高める各種施策を進

められているもの。

- 6) SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）とは、人と人とのつながりを促進・サポートする、社会的ネットワークをインターネット上で構築するサービスのこと。フェイスブック（Facebook）やミクシィ（mixi）が有名。ミニブログサービスのツイッター（Twitter）も広い意味での SNS とされることがある。

参考文献

- (1) 大塚敬：総合計画策定プロセスへの住民参加の効果と課題～無作為抽出による直接参加型住民参加手法の可能性～，季刊政策・経営研究 2010 vol.4, 三菱UFJ リサーチ&コンサルティング
- (2) 篠藤明徳：まちづくりと新しい市民参加－ドイツのプラUNKスツェレの手法－，2006, イマジン出版
- (3) 大沼健太郎：SNS の活用による地域の課題解決，NRI パブリックマネジメントレビュー 2008.6Vol.59, 野村総合研究所
- (4) ふくおか 21 世紀プラン懇談会事務局：ふくおかの 21 世紀 あすの街づくりを考える活動の記録 1985, 1986.3, 福岡市
- (5) アジアのリーダー都市ふくおか！プロジェクト事務局：みんなが描いた福岡市の未来，2011.12, 福岡市総務企画局企画調整部
- (6) アジアのリーダー都市ふくおか！プロジェクトホームページ：<http://f-shinvision.jp/>